

# 学習アドバイザー制度導入による学習支援の試行

伊藤桂一 菅原英子 田中将樹 中沢吉博 駒木根隆士 安東至  
秋田工業高等専門学校 電気・電子・情報系

## 発表の概要

秋田高専では平成25年度から専攻科生を学習アドバイザーとして雇用し、低学年を主な対象とした放課後補習を行っている。最初は電気情報工学科(現:電気・電子・情報系)の1学科で行い、平成26年度は2学科、平成27年度は全校を対象にして試行してきた。本プロジェクトの目的は学生が低学年のうちに自学自習ができるように支援することであるが、学内に勉強する雰囲気醸成し、指導する側の専攻科生が人材として成長することも期待できる。

実施時期は後期中間試験の直前、実施場所は各学科オープンスペース、財源は学内の競争的予算を利用した。結果として、参加を任意で促すだけでは学生の利用状況が悪いこと、学科や年度によっては専攻科生の確保が困難になることが分かった。平成28年度は対象学科を電気情報工学科の1学科に戻し、学習アドバイザーに専攻科進学予定の5年生を入れ、科目との連携、実施時期の分散などの試行錯誤を続けている。アンケート結果などを基に本プロジェクトの活動内容と成果について報告する。

【キーワード】授業手法, 人材育成

## 学習アドバイザー導入の背景と目的

近年、学生の学力の低下傾向に拍車がかかっている。少子化、倍率低下などの社会的な要因が考えられる。

- ・勉強の習慣が乏しい
- ・目標に向かって努力することができない
- ・そもそも目的意識が低い
- ・コミュニケーションをとることが苦手
  - 興味がないから合格すればよい、とだけ思っている学生が多い。テストで点数はとっていても実力がつかない。
  - 結果として「就職できればよい」になる。

対応

高専入学後に学生の意識を変え、学習を支援する方策が必要。先輩学生に協力してもらうことで、双方に教育効果が期待できる。

### 学習アドバイザー制度を導入(H25~)

- ・上級学年(主に専攻科)の学生が主に低学年の学習をサポートする(放課後補習)。
- ・勉強の仕方や進路に対するアドバイスも期待できる(メンターとしての役割)。
- ・勉強場所の提供(オープンスペースの開放)

## 学習アドバイザー制度の変遷

**H25年度**

- ・後期中間試験を対象に実施(直前と期間中の2週間)
- ・電気・電子・情報系のみ対象
- ・指導側は専攻科生有志
- ・放課後補習がメイン(図1)

➤ 1系(学科)で試行。学内予算措置により実施(毎年申請)



**H26年度**

- ・後期中間試験を対象に実施(直前と期間中の2週間)
- ・機械系と電気・電子・情報系の2系(学科)が対象
- ・指導側は専攻科生有志
- ・放課後補習がメイン(図1)

➤ 2学科で試行。専攻科の同じ専攻のくくりで実施。



**H27年度**

- ・学年末試験を対象に実施(直前と期間中の2週間)
- ・全校が対象
- ・指導側は専攻科生有志
- ・放課後補習がメイン
- ・PR用のチラシ作成(図2)
- ・4年生以下の学生に学習アドバイザー制度の周知状況に関するアンケートを実施

➤ 全校を対象に試行。

**H28年度**

- ・11月以降の後期を対象
- ・電気・電子・情報系のみ対象
- ・指導側は専攻科生有志と5年生有志(専攻科進学予定者)
- ・放課後補習とクラスへの講話

➤ 1系(学科)に戻して実施。

図1 学習アドバイザーによる放課後補習の様子(上:平成25年度(電気・電子・情報系OPスペース), 下:平成26年度(機械系OPスペース))

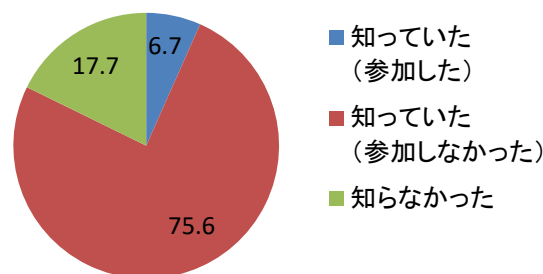


図2 放課後補習のチラシ(平成27年度)

## 効果と課題

H27年度に学習アドバイザーの認知度を調査(4年生以下対象、年度最終週に授業内で実施)

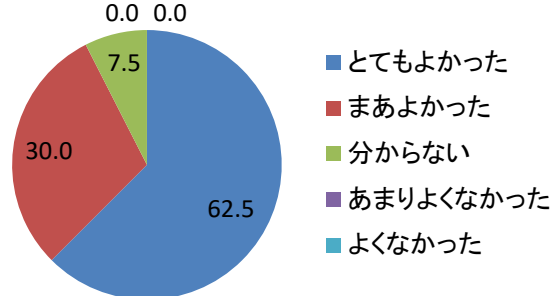
Q1. 放課後勉強会を知っていましたか?



系(学科)、クラスで差が大きい。教員の促し方の影響大。

(回答数:631名)

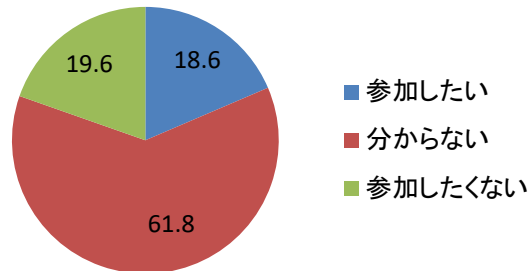
Q2. 参加してよかったですか?



参加者の満足度は高い。科目とリンクすると参加者は増加。

(回答数:40名)

Q3. (知っていたが参加しなかった学生について) 今後参加したいですか?



分からなければ友達or教員へ質問が多い(第3の選択肢)。

(回答数:474名)

### 【まとめ】

- ・参加者増は長年の課題(来なくてもよい学生が来て、本当に来てほしい学生は来ないのが現実)
- ・指導側のモチベーションは高い。教室へ出向き、宣伝などするなど非常に協力的。ただし、系(学科)によっては専攻科学生の確保が困難
- ・専攻科生が相手でも参加者の敷居が高い(年頃の数年の年の差は大きい)。潜在的なニーズを掘り起こし、学校全体に勉強する雰囲気が根付くことが目標。